

史跡快天山古墳発掘調査現地説明会資料

令和7年8月23日（土） 丸亀市教育委員会

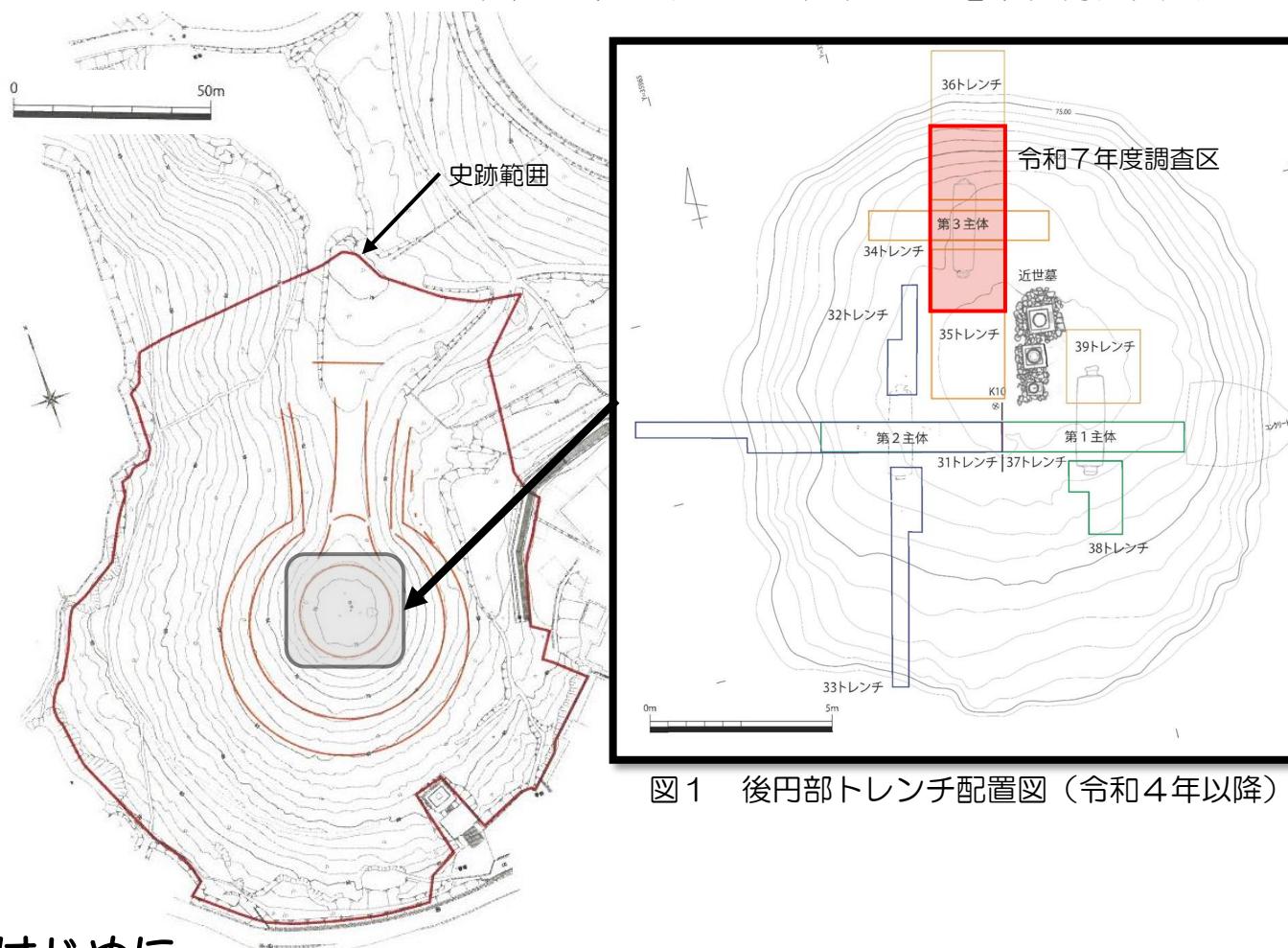


図1 後円部トレンチ配置図（令和4年以降）

刳拔式石棺

快天山古墳の石棺は、高松市国分寺町の鷲ノ山産の角閃石輝石安山岩をくりぬいて作成されており、棺身には作り付けの石枕（いしまくら）が彫りだされています。また、両端部に縄掛突起（なわかかけとっき）が彫りだされている点も特徴的です。



写真1 石棺を加工した工具の痕跡（3号石棺身東内側面）

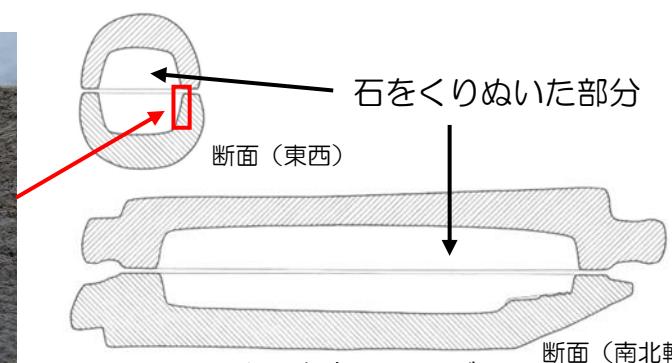


図2 くりぬきイメージ（綾歌町2002第8図抜粋に加筆）



写真2 3号石棺蓋取上げ前（北西より）

はじめに

史跡快天山古墳は、古墳時代前期に築かれた前方後円墳で全長98.8mを測ります。後円部には、3つの埋葬施設が設けられ、それぞれに刳拔式石棺（くりぬきしきせっかん）が埋納されていることが大きな特徴となっています。これまでの調査で、3基の石棺が同時に埋納されていることが確認されました。

昭和25年に一度発掘調査が行われており、各々の石棺は蓋が開けられ、鏡や鉄剣、管玉等の副葬品が発見されました。調査後は、石棺の蓋を閉め、そのまま埋め戻されていました。

丸亀市教育委員会では、過去に開けられている石棺の保存状態や埋葬施設の構造を把握し、今後の保存整備方法を考えていくために、発掘調査を行っています。今年度の調査では、75年前に開けられて以来確認されていない、石棺内部の保存状態や、棺や槨の構造について調査を行っています。

令和6年度の発掘調査では、3号石棺蓋のうち南端と北端にヒビがあることが確認されました。ヒビは石棺を特徴づける縄掛突起周辺にあり、突起の下の土が柔らかい状態であったことから、このまま埋め戻した場合、将来的に石棺蓋が損傷する可能性が考えられました。

そこで、石棺蓋を取上げ、蓋の詳細な分析・調査を行ったのち保存のために適切な処置を行う方針を決め、今年度の発掘調査の一工程として蓋の取上げ作業を実施しました。



写真3 3号石棺蓋①ヒビ状況（北西より）



写真4 3号石棺蓋⑤ヒビ状況（南より）



写真5 門型クレーン設置状況（北より）

写真6 鉄杵クレーン使用状況（北より）

石棺蓋は5部材に割れていたため、北から順に①～⑤の番号を振り、蓋①から順に取上げ作業を行いました。

最も大きい蓋①の部材で推定約300kgと大変重く、人力での取上げは不可能です。

石棺蓋の取上げ作業は、墳丘上に大型重機を入れることができないため、組み立て式の門型クレーンを用いました。

また、吊上げた石棺を墳丘外へ搬出する際には、石棺部材を軽トラックに載せるため、組み立て式の鉄杵クレーンを用いました。



写真7 蓋④吊上げ状況（北より）

写真8 蓋④吊上げ状況（北より）



写真9 蓋①梱包状況

吊上げは、蓋をわずかに持ち上げた隙間に板を差し込み、板ごとベルトで固定して行いました。このとき、石棺材に傷がつかないように、ウレタンマットや布団で養生しています。

吊上げた石棺蓋は、部材ごとに軽トラックで墳丘外に搬出し、状態を確認したのち梱包を行って美術品専用運搬車に積み込みました。取上げた蓋は奈良市の元興寺文化財研究所に運び、クリーニングをおこなったのち、詳細な分析・調査を行います。

赤色顔料

蓋の内面には赤色の顔料が全体に塗られていました。

古墳時代の赤色顔料は、水銀を主体とする「朱（しゅ）」と、赤色の酸化鉄を主体とする「丹（に）」の2種類が知られており、本古墳に用いられた顔料については今後分析を行う予定です。



写真10 棺内の赤色顔料（北より）

3号石棺の石枕

昭和25年調査時の図面では、石枕の外側の線が繋がった状態（赤丸箇所）で記録されていましたが、実際に確認したところ線が離れていることがわかりました。こうした石枕の形状は、石棺の作られた順番を考えるうえで重要な資料となります。



写真11 3号石棺石枕近影

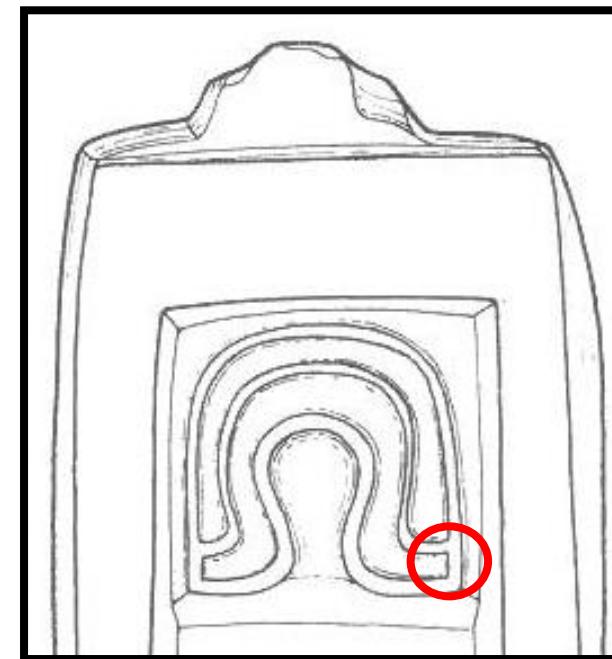


図3 3号石棺石枕（縮尺任意）